

ひらがな工学の勧め

東京大学名誉教授、
前名古屋工業大学長、
テクノサーチ株式会社
代表取締役社長*

柳田 博明

Hiroaki Yanagida
Professor Emeritus, University of Tokyo
Former President of Nagoya Institute of Technology
President & CEO of Techno Search, Inc



時代は大きく変わろうとしている。特にわが国では、人口増加が止まった。この趨勢は長期的なものと推定できる。わが国がはじめて遭遇した大変革点なのである。この事態に消極的に対応するか、積極的に対応するかで、これからの社会が充実したものになるか、衰退を悲しむものになるかの分岐点となる。しかし、同じ積極的対応といっても、今までの思考法の延長で解決策を講じてもうまくいかない。この変革は、小さい波の中での変動ではないからである。長期的、本質的な変動であることを深く認識して対応しなければならないのである。筆者はこの変革に、ひらがな工学で対処することを提唱したい。

今までの工学は、カタカナあるいは漢字で表現されるものであった。力で他を押しつけるものであった。資本あるいは労働力を集中して競争に勝とうとしてきた。複雑さを厭わず技術を作り上げてきた。複雑化しすぎた技術を、筆者は「スパゲッティ症候群」に冒されていると断じてきた。昨今の、市民の技術離れも、技術が複雑になりすぎて、疎外感を味わっているからである。スパゲッティ症候群は5つの兆候からなる。第1は、スパゲッティが皿に盛られたように、こんがらがって、理解の糸口がつかめない、論理の展開がわからない、結論がわからないと言う様相を指す。第2は、問題解決を部品・成分の添加で果たそうとする手法を指す。この結果、技術はますます複雑化する。第3は複雑なほど高度という価値観である。そして第4は、思考の優先度を、本質より枝葉に置いてしまうことである。最後に、第5として、複雑化したために、技術としても、劣化してしまうし、市民からも支持されなくなってしまう。これらスパゲッティ症候群から脱却するためにも、新しい工学的手法が展開されなければならないのである。ひらがな工学は、このためのものである。

ひらがな工学とは、やさしさ、しなやかさ、しぶと

さ、のニュアンスを持つものである。これらは、わが国が古来持ってきた良き伝統である。高度成長によってどこかに捨ててきてしまったものでもある。ひらがな工学は、わが国からの発信である。ひらがな工学がどんなものであるかを説明するには、事例を紹介することがよいであろう。筆者が主宰する、簡明技術推進機構では、これぞ簡明な技術であるというものを選び、表彰してきた。ぜひホームページ**を参照していただきたい。その中でも、(株)INAXのソイルセラミックス、河合石灰工業(株)の透水性タタキ、清水建設(株)のスーパーロッキングダンパーは、ひらがな工学といえる典型的な例である。いずれも、環境にやさしく、人にも優しく、無駄を省いている。これからの時代を生き抜いていく重要な価値観がそこには示されている。

筆者は、これからの時代は、個の確立に基づく、個の発露の時代であると提唱している。個の確立とは、主体的な主張ができる基盤を持つということである。他者に、責任を転嫁しないで生きるということである。そして、個の発露とは、個性を躍動的に発現することである。わくわくする人生を送るということである。これは、腕力の世界ではない。個性の躍動に価値観を見出す世界である。個の発露の場として、推奨できるのが、起業である。筆者は、個の確立と発露の根源はオリジナリティであると考えている。その根拠として、特許を申請することを進めたい。自己責任、個性の発揮のために、力まず、しなやかな企業体を構築しなければ、今までの腕力に任せるやり方の企業活動に巻き込まれてしまう。ひらがな工学の発想で、業を進めてもらいたいものである。

* このほかの主な活動 = 学術振興会・学術システム研究センター副所長、簡明技術推進機構代表、賢材研究会会長、新産業創造研究会理事長、ほか。

** <http://www.netcomuk.co.uk/techdemo/index.html>